
外なる者

首藤環

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

外なる者

【Nコード】

N4638BA

【作者名】

首藤環

【あらすじ】

人生が嫌になった人嫌いのニート主人公が宇宙の神達に愛され魔法先生ネギま！の並行世界に転移して長生きしながら世界の推移を手を出して楽しむストーリー 銃も出るよ剣も出るよ魔法も出るよ主人公最強でやりたい事をやります。

だいぶ外道かも知れませんが自重なしのこのありさまだよ！！

絶望の味（前書き）

どうも首藤といいます。

クトゥルフ好きをこじらせてこんな小説を書き出しました
最初は非常に鬱な展開な上展開が遅いです。

そんなんでも構わんよという読者さんを待ってます。

罵倒の言葉も悪い点の指摘と一緒にお願いします。

絶望の味

「まじめに仕事してきてその結果がこれか・・・？　もうやっ
られん・・・」

畜生、こんな社会なんてクソくらえだ。

俺は財務省でキャリア組を率いている父親のいる家庭に生まれた。
何不自由ない家庭だったが政府高官という立場にいる父親はエリ
ー意識に凝り固まった人間だったし、もともと建設会社の社長令嬢
だった母親もそれに感化されたのか、この家系は皆がエリートであ
るべきだと思っていた。

俺も子供なりにその考えを受け止め、努力をしてきた。だが、俺は
勉学の才能を持っていなかったようで、良いところが秀才どまりだっ
た。どうしてもほんの一握り存在する天才と呼ばれる人間には勝て
なかった。全国模試でもわずかな綻びが現れ天才には後一段届かな
い。父親にはそれが我慢ならないようで、

「いいか！？　一位でなければ最下位と同じだ！　二位以下なん
て価値は無いんだよ！？」

と言われながら殴られ続けた。何カ月も、何年も。そして努力し続
けた。

しかし両親の自尊心と愛を受け止めるのは俺では無く一人の兄だ
った。

俺よりも一段上の存在であろう天才の兄は俺には無いものをいくつ
も持っていた。人望、名声、人に好かれる人間性。そして何よりも
実力が有った。

俺はひたすらにうらやみ、その背中を追いかけた。だが天才にとっ

てただの一段でも凡人にとっては何段にも見えているものだ。当然、凡夫には登れない段もある。だが兄はそれらを軽々と超越していった。俺にはそれ眩しかった。

それから兄に追いつけることもなく時間だけが流れた。

兄は国外の天才たちの集う大学を卒業し帰国した後、外務省にてキャリア組の出世頭を務めているという。その一方で俺は国内では一流と言われている国立の大学を卒業したが、公務員のキャリア組に入る試験に落ちた。両親はそれに落胆し改めて俺に失望した。だがせめてもと父親が大企業とのコネを使って何が何でも就職させようとした。

だが、その行為は俺の中の一線を超えたものだった。

親が何と言おうと自分の為になりそうだから支分の為に全ての時間を費やし、努力を重ねてきた。そう、自分一人で。分かりやすく言えば人生をかけてプレイしていたゲームのデータを勝手にしかも修正不可能ほどに改変されかけたのだ。

22年間の間溜っていたフラストレーションが一度に噴出した。

激昂などというぬるいものではない。あまりの怒りに父親を殴り飛ばし啞然とする家族を尻目に、自ら勘当して家を出たのだ。

そうして初めての一人暮らしがボロアパートで始まった。なぜか兄だけはたまに訪ねてきてはなにかしら置いて行った。まあ、困るわけではないからいいんだけどな

生活の為に働かない訳にも行かないので一応企業向けのPCソフトを作っている会社に就職はしたにはしたがまさにブラック企業といったやつで月150時間以上の残業上司からの無責任な仕事の依頼などなど週一回も家に帰れないことも普通だった。給料の支払いが滞る事もあった。

それから2年が過ぎた春の日俺が昼休み中に誰もいない喫煙室である上司がこっそりと話しかけてきた。

「ちよっと良いかい？ 君は非常に優秀だと聞いている。そんな君

にひとつお願いがあるんだが」

何やらきな臭いが自分よりはるかに階級が上の部長だったので無下に
にするわけにもいかず、

「・・・何でしょうか？」

「あるソフトを君だけで極秘に作ってもらいたい。この事は誰にも
言わないで、何に使うかも聞かないでほしいが、社運がかかっている。
観ての通りわが社は今不況の中にいるだがそれを作ってもらえ
れば会社としてかなりの収入が見込めるんだ。逆に作れなければ今
でも苦しい給料の支払いがどうなるかわからない」などとその割に
楽しむように言ってきた。

とてつもなく胡散臭いがそもそもこんな会社で上司の話を断った
らどうなるかわかったもんじゃない。給料を引き合いに出されるの
も苦しいしが。仕方なしに

「お話を詳しく聞かせていただきます」と言うと

「そうか・・・ありがとう 詳しい事はこれに入っているから持っ
て帰ってもいいよ。じゃあまかせたよ」と言って？社外秘？と書か
れたファイルをテーブルに置いて立ち去った。畜生、まだ受けるこ
はいつてねーだろうが。

仕方ないので家に帰ったのちファイルを開くと中には資料とUS
Bメモリが入っていた。USBには作るソフトの概要と骨組みそし
てメッセージが入っていたあまり深く考えても仕方がないと思い、
仕事をしながら1カ月ほどで作り持って行きファイルと一緒に部長
に引き渡した。

「ありがとうこれでわが社は救われるだろう」と満面の笑みで大げ
さに言われたがしばらくはなぜか会社では何もなかった。その一週
間後に事が起こった。突然、会社のお偉いさんの集まりに呼ばれた
と思ったら会議室に連れて行かれた。なんか報酬でももらえたり昇
進したりするのかなと思いつながら。

入るとすぐに一人に（たしか営業部長の人）自分でこの間作った
ソフトを見せられ

「これを作ったのは、君かね？」と尋ねられた。

「はい私が作りました」と俺が答えると周囲から何をしたかわかっているのか？ とか勝手なことをしやがってなどとボソボソ聞こえてくる。

ここに来て俺はようやく作ったソフトがかなりマズイ事態を起こしたことに気がついた。しかし、何をするものを作ったのかは分からないので言いようがない。

「まさか君が単独でこんなことをするとは・・・思いもしなかったよ。期待していたんだがね。危うくわが社に大損害を受けるところだった」

あまりに唐突なことでは何の事を言ってたんだこの人たちは？ とフリーズしてしまった。

「待って下さい！ 何の事を言われているのかわかりません！」

「君には知る必要のないことだ。大事なことは君が起こした問題の結果だ。私たちにできるのは君を処罰することだけだ」 何が起きたのかも教えてはくれなかった。目の前が暗くなる。足が震える。脳髓がしびれる。

「そんな・・・」

「しかしいったいこんな重要なファイルをどうやって持って行ったんだね？」

「うちの部署の部長が私に依頼したんです。そしてその時に渡されたんです！」

「本当ですか？ 開発部長？」 営業部長がチラリと俺の上司である開発部長を見る。すると、

「そんなわけじゃないですか。そんな？ 命令？を出したおぼえはありません。」 実に涼しげな顔で見返す。それを聞いて記憶がいきなり蘇る。確かにあの時「お願い」と言ってやがった命令ではなかった。あの話を聞いていた奴は居ないだろう。ということは圧倒的に発言力のある上司にかなうわけがない。

クソクソクソクソッやられたッ！ おそらく上司は成り上がりのネ

タでも作ろうとして俺にやらせたんだろう。だがそれは失敗して問題になった。その責任から逃れるためにあらかじめ俺というスケープゴートを用意していて今尻尾として切り落としたのか・・・

「そう言えば私のデスクから急に無くなっていたんですよねえ」などとうすら笑いを浮かべてやがる。

「彼も出世するために目立ちたかったんだろう」 豚野郎がぬけぬけと言いやがって。

「まあ君の処分は後日知らせるよ」 どうせクビ以外にねえだろ機密ファイル盗んでやばいもの作った事になってんだから。そう思い、その日はそのまま自宅に帰った。

そして冒頭に至る。次の日辞表を提出してきた。その時に部長は「君のように優秀な人が辞めるなんて非常に残念だが、何か事情があるなら仕方無いな」

などとしらじらしくのたまいやがった。そして家に帰り横になって今までの人生を振り返った。生きてきて、強制され、利用され、排除された。

もはや人と深くかわるの嫌いになった。一人で居たかった。兄とも会わなくなった。エリートである兄を見ていると劣等感に苛まれるからだ。

だがそんな状態だった俺にはある程度の金が有った。今までの人生には勉強に、仕事に追われて金を使う自分の時間なんてほぼ無かった。

今はまるで無限にあるように感じられた。そうだ、これからは自分の好きな事を探そう。俺はようやく自分の人生を見つける事を始めたのだ。

地下世界（前書き）

説明多し。

地下世界

俺は生まれて初めての遊ぶという行為を心から楽しんだ参考書以外読んだ事のない本を読み、触ったこともなかったゲームを遊ぶ。動かしてこなかった体を鍛えるために武道を習ってみたりした。

すべてが新鮮で味わったことのない快感だった。それからしばらくは寝る間も惜しんで遊んでいた。素晴らしく充実していて楽しい時間だった。

そして、最も嬉しかったのが孤独だった事だった。もう誰にも裏切られず、苦しめられずにいるという事実が俺の心を満たしてくれた。

それからの半年はひたすらに楽しみを求め続けた。今までの分を取り戻すように。

しかし、そんな夢のような時間にも終わりが来た。貯めていた金が尽きたのだ。完全に。

今食べる物もないのだ。金がないと生きては行けない。だが、俺にはもう人とかかわり合う事はただの苦痛でしかない。働く？ 仕事をする？ 全てが他人にかかわっているじゃないか。そんな事なら死んだ方がマシだ。と思った。人間なんて見ているだけで苦しいのだから。武道を人に教わるのも大きな決断だったぐらいだ。

金がないという事は当然家賃も払えず、アパートからも追い出された。もともと体が弱いわけではないが、真冬の屋外に放り出されっぱなしで体を温める術もないとなると当然風邪をひいてしまった。

「いっそ、自分で幕を下ろすか・・・」

このまま生き延びられるはずも無いと思い最後の金と荷造り用の紐を持ち富士樹海へと向かおうと思う。

電車やバスに揺られながら楽しかった時間を思い出す。頭が痛い。だが、ぼんやりした頭で記憶をたどっていた。次第に悪くなっていく体調は気にならなかった。

やはり、ただの風邪ではなかったようで、はや視界がおかしい。明滅している。だが、もうどうでもいい。

樹海の端に着いた時には木やバスの輪郭があやふやに見えてきた程に悪化していた。それでも死ぬぐらいはできると思い、樹海に足を踏み入れた。

首を吊るのに最適な場所を探して歩き続ける。偶にここに眠る先達とご対面したりもあったが、鼻歌交じり上機嫌だった。頭の中は楽しかった事でいっぱいだったから。

しばらく歩きまわっていると、紐がブラ下げやすそうかつ首も吊りやすそうな高さの見事に九〇度に曲がった木を発見した。さっきから足もとも分からないほどに頭痛がひどいのでここにしようとなんか決めた。

曇天の森の中、首を吊る前に人生最期の体操をして、顔を拭く。そして死ぬ為に前を見る。

するとその視界の隅におかしなものが居た。
黒い女。

細かいところは分からない。だが、ここに来てなぜかあの女に近づきたいと強く思ったのだ。

その瞬間俺は、女が居た事にも驚いたが、何よりも人に関わりたと思った自分に驚いていた。だが人嫌いな自分がそう思ったのなら、それに従ってみようと頭の中で答えを出した。

「あんたは一体誰なんだ？」

静かに問いかけるだが無音の森には良く響いた。すると反応を示す

わけでもなく、後ろを向きゆっくりと歩き出した。

俺はそれを見失わないように慌てて追いかける。

引っかけた縄もそのままに、その女に近づいてみる。だが、女にくら近寄っても距離が縮まらない。俺は焦っているわけではなかった。ただ強く願っていた。話してみたいと。

歩き続けるうちに女は真暗な洞窟に入った。俺もそれに続く。下に伸びるスロープのような洞窟の天井は低くようやく通れる程度だった。そしてひどく臭う。まるで死んだ魚の上を歩いているようだった。

女は何処までも降りて行った。俺もそれを追ひ潜りつづけた。もうどれだけ歩いたか分からない洞窟に入る時ライターで作った即席の松明もうはるか前に消えている。

真っ暗な中で響くペタペタという素足の女の足音を頼りにして歩くだけだった。

恐ろしく永い時が経ち、自分でも正気を疑い出した時、突然に前を歩く女の足音が止まった。見れば、前方にはぼんやりと明るい平坦な遺跡のような通路が見えたそこまで行くと長い通路である事が分かった。

先に行くほどに明るくなっている。女の姿は見えないが明りに包まれたことで俺には心の余裕が生まれた。お席の壁に彫っている彫刻が目止まった。

「何だこりゃ？ 頭がトカゲみたいな人間が普通の人間の上にいる？」

そしてさらに先に行くと

「今度はトカゲ人間が触手付き巨大アンモナイトとこれまたでかいタコを祀ってる？ おいおい、ハハ・・・こりゃ何処の宗教の仕業だよ？」思わず寒い笑いが出てしまった。

だがその次に壁に彫られていたものを見て俺は少し驚いた。

「おい、冗談だろ？ ここ本当にどこだよ地球だよなあ？」

そのトカゲ人間たちが普通の人間を食べている姿だった。だが今の

俺には死ぬ事をはじめとするリスクが最初から前提でここに来たので「まあ喰われるって落ちも一つあるな」で済んでいた。

その先には空に浮いた輪に向かうトカゲ人間の靈魂のようなものが彫られていたが、壁を見ることに飽きた俺の興味は女の方に戻っていたので正直どうでもよかった。

「まったく、女はどこに行っちゃったんだよ」

とひとり愚痴りながら通路を進んで行くと非常に大きな空間に出た。薄暗いため空間の端も天井もはまるで見えそうにないが進むしかないのとおりあえず突っ切ってみようと考えただ歩く歩く。

この遺跡に出てからなぜか頭痛は消え体調はこの上なく良かった。おかげで鍛えておいた体が機能を果たしてくれている。とりあえずはありがたかった。

リラックスしながら歩いていると薄闇の中から高さ20mはあるだろう巨大な祭壇が突然姿を現した。

「うおーでっかいなー」人の心理としてこういった大きな物体を見ると無性に

「登ってみるか・・・」

登りたくなる。昔の登山家もそこに山が有るから登ると言っているし。

「よっこいしょ」若干おっさん臭い言葉を言いながら石の階段を登っていく。

「ふー歩き通しだったし疲れたな・・・で、何が有るのかなーっと」

「短剣と古い本か・・・チッ、いらねーw剣はキモイ肉塊みたいなのに刺さってるし本は人の顔みたいな表紙だし」

祭壇の上も物色し終わったと思った瞬間すぐ後ろから

「勿体ない事しなさんな。そんなでお前さん良くここまで来れたな」と女の声に話しかけられ驚いて振り返った。

地下世界（後書き）

やつとレギュラー登場

次話から主人公の名前も出てきます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4638ba/>

外なる者

2012年1月12日18時45分発行